

5月 令和6年5月1日 ちびっこの森通信 vol.222

☆☆今月のテーマ☆☆

- ・ 戸外遊びから草花や昆虫と触れ合い、季節を感じる。
- ・ 「母の日」を通して、お母さんに感謝の気持ちを持つ。

～今月の園内学習～

- ・ 足し算…5の段
- ・ 掛け算…5の段
- ・ 数字カード…1～20の数字
- ・ 食べ物カード…今月の旬な食べ物
- ・ 漢字カード…小学校1学年で習う漢字30
- ・ 歴史カード…「徳川家康」ほか
- ・ ひらがなカード…「な行」
- ・ 国旗カード…リビアほか
- ・ 地理カード…福岡県ほか九州地方
- ・ 声に出して読みたい日本語…論語ほか
- ・ 英会話…動物、曜日、季節の種類
- ・ 絵画カード…「白樺の林」他

♪今月の歌♪

◇おかあさん ◆こいのぼり

～行事予定～

- ・ 書道教室(年長)…16日・30日
- ・ 避難訓練…15日
- ・ リトミック…13日
- ・ 英語教室…8日〔年少・年中〕
9日〔年長〕
- ・ 体操教室…21日〔年少〕
24日〔年中・年長〕
- ・ お誕生日会…29日
- ・ 身体測定…14日

～保育のポイント～

ダスティン・ホフマン主演の映画「レインマン」によって、よく知られるようになったサバン症候群。多くは自閉症でありながら、(自ら得意分野を発見し、驚異的な集中力により発達させた「記憶力」などの)知的や芸術分野で並外れた才能を生まれながらに示す人々を指します。一方、何らかの脳損傷を経験したあとに絵画や音楽、あるいは暗算などで際立った能力が出現した「後天性サバン症候群」と呼ばれる人々もいます。では事故や病気でなく、人為的に脳を刺激する方法で、普通の人でもサバンのような能力を後天的に出現させるのは可能なのでしょうか。この1つの解のコツは、両親の得意または不得意分野を含めた能力はそれぞれ60%の割合で遺伝し、得意分野を見つけた後の取り組みから(0～8歳までの)養育環境で集中的に取り組むことによりその能力をさらに40%伸長することができると言われています。例えば、鈴木メソードと呼ばれる早期才能教室で当初の小、中学生の開始時期を4、5歳へと早めたことでお子さんのバイオリン習熟度の出来、不出来の差が改善されたそうです。このことから(同じ場合や違う場合がありますが)両親のそれぞれの得意とする能力がお子さんの最も得意とする能力と推定でき、それが分かった後はお子さんが喜び、自発的に集中でき、漠然としたものより具体的な目標をもって取り組むことによってその能力を伸ばすことに繋がると言えます。つまりは、サバン症候群のような脳力を発揮できる可能性に近づけるのではないかと思います。 ～幼児教育と脳(澤口俊之著)第四章 「いかに育てるか」より抜粋～

さくら組だより

今年度も新たな仲間を迎え入れ、前半は不安から涙ぐみ落ち着かない様子、そして中旬くらいからニコニコ笑顔が見られ期待に胸を膨らませながらの園生活へと変化していっているように見受けられます。はじめの内は当然ですが、室内の雰囲気や人間関係など様子見だったのが、年上の子たちとも次第にかかわり合い、一緒に遊べるようになってきたので安心しているところです。課外教室の英語では先生との“Yes”や“No”のやりとりも堂に入った感じだし、体操教室ではボール投げや鉄棒などで慣れないことにも尻込みすることなく積極的な取り組みが見えるのが何よりと感じています。生活基礎習慣の登園後の自分の持ち物整理、(脱いだ)衣服や食具の片づけなど自立に向けた活動にも精を出しています。こどもたちがこれからいろんなことに楽しく前向きに取り組めるようによく見守っていきたいと思います。

ひまわり組だより

久々に桜が見守る新年度のスタート。みんなは進級式で1つ上に上がった実感がじわじわ沸き、「やるぞ!」という思いで晴れやかさがにじみ出た表情からは1つ下の子への思いやりも感じられ、頑張っしてほしいなぁ～と感じているところです。園における中堅どころとしての活躍が大いに期待されるのですが、対人関係ではこだわりからコミュニケーション力より腕力が勝るところ見受けられるのでよく見守り、自らの発信と他の意見との調整を上手くしていけるように見守っていきたいと思います。毎年来月に商業施設で開催される「家族の似顔絵」への作品では日頃のお父さんやお母さんの顔かたち、髪型や表情一つひとつにみんなの思いが一杯つまった形となって作成していったので乞うご期待下さい。

ゆり組だより

園の最高峰の年長クラスまで登り詰め、いよいよ自分たちの出番とばかりに「かっこいい」や「お勉強も頑張る」などそれぞれが思いをもって新年度をスタートさせました。異年齢活動の一環で一緒に公園やお散歩などの際、誰に言われるでもなく、年下の子を優しくリードするなど、その自覚と行動にはしっかりしたものが芽生えており頼もしく感じています。年長児になると就学準備として絵の具、鍵盤ハーモニカや書道教室での活動がはじまりますが、先月はその先陣を切るように書道教室がありました。今までのお絵描きと違い、書く姿勢や鉛筆の持ち方など事細かなアドバイスを受けながら、初回は横線書きをしました。今までと違い、自由気ままにザッ～と描くのではなく、一つひとつゆっくりと丁寧に仕上げていくのは慣れていない分、気疲れもあったようです。これから修行(?)を積み、「字」書きにも慣れていって欲しいなぁと思います。

給食だより

～好き嫌いは成長の証、その克服方法は?～

こどもの健やかな成長を願うが故に離乳食から幼児食へと移行する頃、お子さんに見られる好き嫌いに頭を悩ませる保護者の方は多いのではないのでしょうか?そして、お子さんに「いろんな食材を残さず食べて欲しい」や「好き嫌いは克服させたい」と思うあまりに、無理強いをしがちな場面がないとも限りません。まずは、お子さんがそうなる原因をいくつか理解した上で対策を考えていく必要があります。まずは、自我の芽生えと口の機能の発達が好き嫌いを生じさせる要因と言えます。離乳食は(生後5～6ヶ月の)ゴックン期、(同7～8ヶ月の)モグモグ期、(同9～11ヶ月の)カミカミ期に(同12～18ヶ月の)パクパク期を経る中、最初の(ゴックンなどの)食べ物の通過点から咀嚼が始まるのに伴い、大人以上に舌の味センサーが敏感な時期ですので母乳やミルクで馴染みのある甘味は別として、基本的な味(甘味、塩味、酸味、苦味、旨味)の内、自然界で腐敗を感じさせる酸味や薬物イメージの苦味は敬遠しがちとなります。ですから、こどもたちの防衛本能からそれらの味覚が強い葉物野菜などを「ベッ!」と吐き出すのはよく目にする光景となっています。また、食べることを強いられたり、食べて腹痛や嘔吐に陥ってしまったり、その食材が嫌いになる「食物嫌悪学習」という現象も指摘されているところです。園における好き嫌い克服の強みは、何と言ってもみんなで食べる機会から「自分も食べてみようかな…」というきっかけに繋がりがやすいことや保育従事者がこどもの様子を見ながら「一口だけ食べてみない?」と声かけて誘導することができることです。そして、食べられたら「かっこいい」や「すごいねえ～」とこどもが前向きになれる言葉かけでさらに食べる方向へと導くようにしたいと思います。園児へのこのような地道な取り組みで徐々に好き嫌いを克服できるようにしていきたいと思っています。お家でも出来ることは試してみたいとき、車の両輪のようにして克服ができるのを願っています。